

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19592523

研究課題名（和文）在宅ターミナルケアに携わる看護師のユーモア志向と危機的場面の対処行動に関する研究

研究課題名（英文）A study of the reality of dealing with difficult situations in terminal care at home by visiting nurses and their sense of humor

研究代表者

田中 愛子（TANAKA AIKO）

山口県立大学・看護栄養学部・教授

研究者番号：10285447

研究成果の概要（和文）：

健康な大学生 6 人を対象に、危機的場面を伴う DVD の視聴後の脳波測定とユーモアに関する質問紙調査を実施し、脳波とユーモアの関連を論じた。結果、ユーモア得点が高い学生の、危機的場面に対処する反応が見られた。

次に、A 市の訪問看護ステーションの看護師を対象に、ターミナルケアの困難な場面を中心とした実施状況 10 項目とユーモア 8 項目の質問紙調査を実施した。35 人の質問紙の分析結果、ターミナルケアの実施状況は積極的に対処しており、5 点満点で 3.5 から 4.4 であったが、ユーモア得点との相関は見られなかった。

最後に、5 年以上の訪問看護師としての経験を有する訪問看護師に、困難場面の対応状況についてインタビューし、質的に分析した結果、6 つのカテゴリーを見出した。それらは、「より良いケアを提供する」「関わりを深める」「その人らしさを大切にする」「家族のちからを引き出す」「チームで関わる」「訪問看護師としての成長」であった。同時にユーモアの重要性も語られた。

研究成果の概要（英文）：

The first phase of the study was to examine the relationship between subjects' sense of humor and ECG or EEG after watching a video titled 24 hours. ECG and EEG were recorded from six subjects, and conventionally analyzed. Those subjects showing higher sense of humor indicated relatively stable  $\alpha$  in EEG.

The second phase consisted of a questionnaire which contained 10 items related to practice mainly about situations with difficult terminal care and 8 items on humor. The subjects were 35 nurses working at a visiting nursing station in A City. As a result, the range of scores on the terminal care items was between 3.5 and 4.4 on a 5-point scale; however, there was no significant correlation with the humor score.

The final phase of this study was interviewing visiting nurses with 5 or more years of experience about their dealing with difficult situations. A qualitative analysis of the data yielded 6 categories: "provide better care," "deepen the involvement," "take care of individuality," "empower the family," "get involved as a team," and "further growth as a visiting nurse." Beside these, the importance of humor was also mentioned.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	200,000	60,000	260,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学（臨床看護学）

キーワード：在宅ターミナルケア,訪問看護師,危機的場面,対処,ユーモア

1. 研究開始当初の背景

ユーモアについてデーケン「たとえ自分が苦しんでいても、相手には愛と思いを示そうとする心の態度」<sup>1)</sup>とし、ターミナルケアにおけるユーモアの重要性を述べている。

上野<sup>2)</sup>はユーモアを、遊戯的ユーモア、攻撃的ユーモア、支援的ユーモアの3種に分けている。本研究で取り扱うユーモアは支援的ユーモアである。ユーモアに関する研究では、宮戸ら<sup>3)</sup>の大学生を対象とした支援的ユーモアは抑うつ性を抑制するという報告がある。看護の領域では、横田ら<sup>4)</sup>が、看護学生のストレスとユーモア、コーピングとの関連性を調査し、支援的ユーモアと情動コーピングに有意な相関関係があったと報告している。福島<sup>5)</sup>は看護職のユーモアとバーンアウトの関連について検討し、支援的ユーモア志向がバーンアウトを予防する可能性を示唆している。また、田中<sup>6)</sup>が、ターミナルケアに携わる療養型病床群に勤務する看護師を対象に調査をした結果、看護師の「自律性」と「支援的ユーモア」には、中等度の相関が示された。

以上の先行研究から、支援的ユーモアは、抑鬱状態を抑制し、ストレスへのコーピングを高め、バーンアウトにも予防的に作用し、自律的に仕事にむきあうことに影響することが示唆され、ターミナルケアの臨床において、支援的ユーモア志向が有効に作用することが予測された。在宅ターミナルケアに携わる看護師が、危機的場面に遭遇して、過度の緊張状態に陥り、本来の力が発揮できない場合がある。その際に、本来の余裕やゆとりを取り

戻すセンスとして、ユーモアに注目するのである。

従来研究の手法は、ユーモアの質問紙を用いた意識調査であり、生理学的にアプローチしたものではない。

本研究は、在宅ターミナルケアに携わる看護師が獲得している、「ユーモア志向」と「危機的場面の対処行動」の関係を明らかにし、ターミナルケアに携わる看護師に必要な要素の一つとして、「ユーモア志向」があげられることを生理学的アプローチおよび質問紙調査、面接を用いて、実証することを目的にしている。

2. 研究の目的

研究期間中に明らかにすることは以下の3点である。

(1) 健康な大学生を対象に、危機的場面を伴うDVDの視聴後の脳波測定とユーモアに関する質問紙調査を実施し、ユーモアのセンスと危機的場面に対する生理的反応（脳波等）の関連を検討する。

(2) 在宅ターミナルケアをおこなっている看護師を対象に「ユーモア尺度」と「危機的場面での対処行動尺度」を質問紙調査によって把握し、2変数間の関連を検討する。

(3) 了解の得られた訪問看護師5名に、在宅ターミナルケアにおいて、危機的と認識した場面と、そこでの看護師のとった行動について語ってもらい、対処行動の内容を質的に探求していく。

3. 研究の方法

(1)の方法について  
看護学生6人を対象に、ユーモア志向に関する

る質問紙調査を行うとともに、恐怖を感じるビデオを視聴してもらい心電図および脳波を記録し、周波数解析してユーモアセンスとの関連を考察した。実験方法は以下の通りである。①被験者を暗室において135度に設定された椅子に座らせ、頭部に脳波用皿電極、手首と両足内踝に心電図貼付電極を装着する。②ビデオ“24hours”を45分間視聴させる。③視聴前10分間と視聴30分間、心電図及び脳波を記録する。④終了後、記録を周波数解析の方法で分析して、時間変動を検討する。

(2)の方法について

A市で勤務する在宅ターミナルケアに携わる看護師を対象に、ターミナルケア時の事例を振り返り、過去の危機的場面での対応力10項目とその乗り越え方と支援的ユーモア志向8項目について質問調査を行った。

(3)の方法について

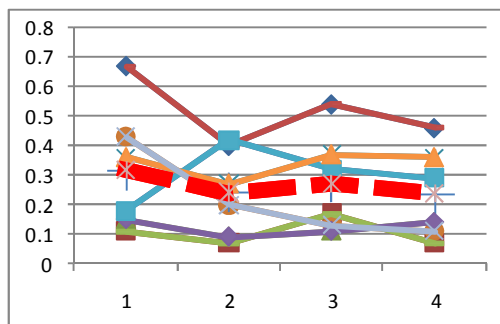
在宅ターミナルケアでの困難場面や危機的状況において、訪問看護師はどのように対処しているのかを明らかにするために、A市およびA市近郊に勤務する在宅ターミナルケアに5年以上従事する訪問看護師5人を対象に面接を行い、そのデータを質的に分析した。

#### 4. 研究成果

(1)について

ビデオ視聴前10分間と視聴後30分間の心電図と脳波の時間変動比較をして次の結果を得た。

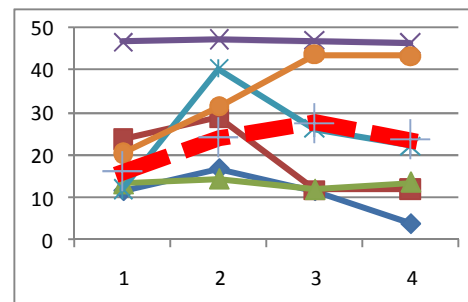
まず、心拍変動指標は、1名の被験者Aを除く5名において、視聴前に比べて視聴終了直後の10分間に大幅に低下した。視聴終了直後には自律神経が交感神経の緊張状態からすぐには回復せず、10分経過以後に副交感神経優位の状態に復帰したと理解できる。



(縦軸は副交感神経割合、横軸は1：視聴前、2：視聴後0~10分、3：10~20分、4：20~30分、点線は平均)

図1. DVD 視聴前後の副交感神経優位度

次に、脳波記録の周波数解析によって $\alpha$ 波の時間的出現率(% $\alpha$ )を求めた結果、視聴前に比べて視聴直後の10分間に大幅に上昇し、統計的有意差(5%)が認められた。視聴時の緊張状態から、視聴直後直ちに安静覚醒状態に移行したと解釈することができる。その中でも被験者Aは視聴前後でほとんど変動を示さなかった。この特異例を除く5名についての結果は、緊張から脱緊張への生理的变化として一般化できる可能性が示唆されたが、今後より多くの被験者集団について更に検証したい。



(縦軸は% $\alpha$ 、横軸は1：視聴前、2：視聴後0~10分、3：10~20分、4：20~30分、点線は平均)

図2 DVD 視聴戦後の $\alpha$ 波割合

最後に対象ごとの脳波の変化を観察すると、ユーモア得点の最も低かった学生が最も脳波の変化が著明であり、ユーモア得点の高い学生の脳波は安定していることがわかった。ユーモア得点の高い学生は、危機的場面(恐怖)への対処ができていることが示唆された。

(2)について

①対象の背景

質問紙の回収数は36件で、そのうち在宅ターミナルケアの経験が不明な1件を除外し、35件を有効回答数とした。訪問看護師としての経験年数は1年目から12年で平均6.1年(±3.3)であった。訪問看護1年目と回答した2名は、同時に7年と13年の看護師経験を有していた。また訪問看護2年目と回答した2名は6年と20年の看護師経験を有していた。看護職としての通算の実務経験は、6年から40年まで平均18.5年(±9.0)であった。

②在宅ターミナルケアの実施状況

10の質問項目のケアの実施状況について最も得点が高かった(「あてはまる」とした)ものは「患者や家族の問題、自分自身の抱えているケアのジレンマや課題を、同僚や上司

に相談する」(4.4)、つづいて「突然の患者の急変に、患者や家族の気持ちを配慮しつつ、適切な対応をする」(4.0)であった。得点が低かったのは「医師と患者と家族の間に板挟みのような状況が生じた時も、その中で最善の方法を考える」(3.4)であり、症状コントロールでは「患者の耐え難い倦怠感への対処」(3.8)は、「患者の痛みのコントロール」(3.9)よりも対応が困難であった。10項目すべてにおいて3.0以上の得点であった。(図1)

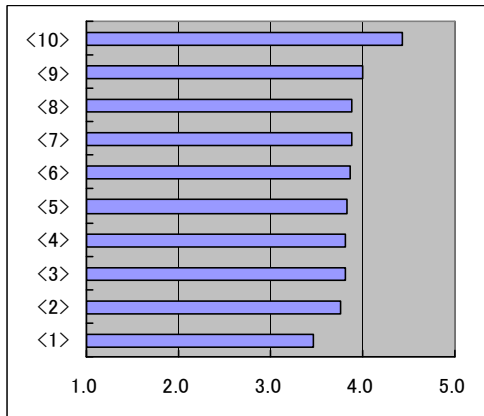


図3 訪問看護師のターミナルケアの実施状況の平均値 (n=35)

注) 質問項目

- <1> 医師と、患者・家族の間に、あなたが板挟みのような状況が生じた時も、その中で最善の方法を考える
- <2> ②患者の耐え難い倦怠感に、医師の包括的指示があれば、その時の患者の状況に応じて薬剤の投与やケアの実施する
- <3> ③急な医療機器の不具合や、点滴等のトラブルに、適切に対応する
- <4> 患者の耐え難い末期の症状に、状況に応じて対応する
- <5> 患者や家族にパニックが生じた際に、患者や家族の気持ちを察して対応する
- <6> 患者の痛みのコントロールは、医師の包括的指示があれば、その時の患者の状況に応じて鎮痛薬の投与をする
- <7> 死の徴候や看取りの方法について、家族の気持ちを配慮して話をする
- <8> 死の不安や恐怖について、患者や家族から相談があった際に、患者や家族の意向を察知して対応する
- <9> 突然の患者の急変に、患者や家族の気持ちを配慮しつつ、適切な対応する
- <10> 患者や家族の問題、自分自身が抱えているケアのジレンマや課題を、同僚や上司に相談する

### ③ 支援的ユーモア尺度

支援的ユーモア尺度の平均得点は図2に示した。ユーモア尺度項目について得点の高い(「あてはまる」とした)順に、「人を救うようなユーモアが好きだ」(3.9)、「人をなぐさめるために、自分の失敗をおもしろおかしく語ることがある」(3.6)、「ちょっと寂しそうな人がいると冗談などをいって笑わせたいくなる」(3.5)となり、最も低い項目は「気がめいるようなときでもユーモアで自分を励ます」(2.6)であった。

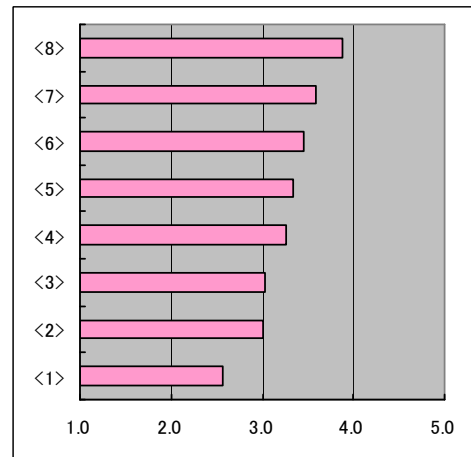


図4 訪問看護師のユーモア得点の平均値 (n=35)

注) 質問項目

- <1> 気がめいるようなときでもユーモアで自分を励ます
- <2> 人が喧嘩をはじめそうなとき、ユーモアを使って中をとりもつ
- <3> 嫌なことがあっても笑いとはせる
- <4> 友人を励ますために笑わせようとする
- <5> あわてたり、騒いだりしている自分をこっけいに感じて人と笑うことがある
- <6> ちょっと寂しそうな人がいると冗談などをいって笑わせたいくなる
- <7> 人をなぐさめるために、自分の失敗をおもしろおかしく語ることがある
- <8> 人を救うようなユーモアが好きだ

### ④ 在宅ターミナルケアの実施状況と支援的ユーモア尺度との関連

「在宅ターミナルケアにおいて、その能力を十分に発揮している訪問看護師は、ユーモア志向である。」という仮説を実証するために、ケアの実施状況の平均値を中心に2群にわけて、ユーモア得点を比較した。得点は11点から50点に分布し、平均値は33.7(±10.6)であった。34点以上(n=20)を積極的に対

応している群、33点以下 (n=13) を普通に対応している群とし、ユーモア得点を比較した。その結果、ユーモア得点は2群間に有意差を認めなかった (Mann-Whitney の U 検定 p=0.824)。

### (3)について

訪問看護師は、様々な困難な状況においても、その中での「より良いケアを提供すること」に最善を尽くし、「その人らしさを大切にすること」「家族の力を引き出す」ことに専心し、「チームで関わる」ことでケアを深めていた。同時に、それぞれの場面を通して「訪問看護師として成長していく」自分でありたいと考えていた。「より良いケアを提供する」カテゴリーは<知識と技術><対象の理解><的確な判断><予測する><症状緩和に努める>の5つのサブカテゴリー、「関わりを深める」は<安心させる><対象の笑顔を引き出す><対象の方の力が抜けるように関わる><タイミングを読む><こちらから近づく><納得がいくまで説明する><対象の気持ちを想像する><ちょっとした変化に気づく>の8つのサブカテゴリー、「その人らしさを大切にすること」は<希望を支える><尊厳ある関わり><寄り添う>の3つのサブカテゴリー、「家族の力を引き出す」は<家族との連携><家族の代弁><家族の力><家族としての役割を果たす>の4つのサブカテゴリー、「チームで関わる」は<医師との連携><チーム内で情報を交換する><同僚を育てる><組織を動かす>4つのサブカテゴリー、「訪問看護師としての成長」は<迷い><自分なりの切り替え><自己研鑽><自分が変わる><ケアを通して成長する>の5つのサブカテゴリーから構成されていた。

また、ターミナルケアにおいて「ユーモア」が患者・家族と医療者の関係を深め、緊張を緩和させ、患者・家族の本音を引き出すことができると考えていた。

### 結論

以上の結果をまとめると以下の如くである。

1) ユーモア得点の高い人は、危機的場面においても効果的な対処をする傾向が見られた。

2) 訪問看護師のユーモア得点とターミナルケアの困難場面における態度尺度には、関連が見られなかった。

3) 困難場面において、5年以上の訪問看護師としての経験を持つ看護師は、「より良いケアを提供する」「関わりを深める」「その人らしさを大切にすること」「家族のちからを引き出す」「チームで関わる」努力をし「訪問看護師としての成長」のために研鑽していた。5人ともにターミナルケアにおけるユーモア

アのちからを実感していた。

### 文献

- 1) A. デーケン、死とユーモア. アルフォンス. デーケン編:死の準備教育第3巻、死を考える、239-254、メジカルフレンド社、1986.
- 2) 上野行良、ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類について:社会心理学研究、7、112-120、1992
- 3) 宮戸美樹、上野行良:ユーモアの支援的効果の検討;支援的ユーモア尺度の構成、心理学研究、67、270-277、1996
- 4) 横田恵一、森田チエコ:看護学生のストレス緩和に対するユーモアの有効性、愛知県立看護大学紀要、vol.9.29-33.2003
- 5) 福島裕人名嘉幸一、和氣則江、石津宏、与古田孝夫、佐竹雅子:看護者のユーモアとバーンアウトとの関連についての基礎的研究、ターミナルケア、vol.11、135-139.2001
- 6) 田中愛子:ターミナルケアに携わる看護職に潜むエンパワーメントに関する研究—ユーモアのセンス、セルフエステーム、死生観の関連から—、平成17年度山口県立大学(研究創作活動助成(A)研究成果報告書

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

田中愛子、訪問看護師の在宅ターミナルケアの実施状況とユーモアセンスの検討、死の臨床、査読有、55巻、2010、掲載予定

[学会発表] (計1件)

田中愛子、訪問看護師の在宅ターミナルケアにおける危機的場面の対処行動の検討、日本死の臨床研究会、2009、名古屋国際会議場(愛知県)

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

田中 愛子 (TANAKA AIKO)  
山口県立大学・看護栄養学部・教授  
研究者番号: 10285447

#### (2) 研究分担者

市村 孝雄 (ICHIMURA TAKAO)  
山口県立大学・看護栄養学部・教授  
研究者番号: 80144468

#### (3) 連携研究者

なし ( )